戸坂潤全集

第三巻

勁草書房刊

戸坂潤全集　第三巻

昭和41年10月10日　第1刷発行
昭和45年 9 月20日　第5刷発行　　定価1600円

著　者　戸　坂　潤

発行者　井　村　寿　二
東京都千代田区神田駿河台 2-3

印刷者　白井倉之助
東京都青梅市根ケ布1－385

発行所　東京都千代田区神田駿河台 2-3　勁草書房

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　　精興社印刷・牧製本
© Printed in Japan
3310-130313-1836

目

次

現代哲学講話

序……1
〔旧版〕『現代のための哲学』序……3
第一篇……4
一　社会に於ける自然科学の役割……7
二　自然科学とイデオロギー……7
三　ヘーゲルと自然哲学……19
四　自然弁証法……40
第二篇……51
五　社会科学に於ける実験と統計……60
六　歴史と弁証法……60
七　イデオロギーとしての哲学……69
八　日常性の原理と歴史的時間……78
第三篇……95
九　新聞の問題……105
一〇　新聞現象の分析……105
一一　アカデミーとジャーナリズム……118
……145

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一二　批評の問題……154
第三篇……167
一三　哲学評論……167
一　思想的範疇論……167
二　京都学派の哲学……171
三　田辺哲学の成立……177
四　ソヴェート同盟の哲学……184
一四　哲学の話……190
〔付一〕　世論の考察……208
〔付二〕　ファシズムのイデオロギー性……213
現代唯物論講話……219
序……221
第一部　物質論……223
一　「物質」の哲学的概念……223
二　空間論……239
一空間の問題　二直観空間　三幾何学的空間・物理的空間　四日常的空間・結論
第二部　認識論……267

三　物質と模写……267
四　実験及び技術……280
1 実験をめぐる問題　2 技術の意義
五　論理乃至論理学……299
1「種の論理」　2 論理の社会階級性
第三部　科学論……320
六　自然科学の世界観と方法……320
七　生物学論……333
一 序論　二 生物学は如何なる科学か　三 生物学に於ける哲学的諸問題　四 文献
八　社会科学論……358
一 序論　二 マルクス主義とは何か　三 唯物史観の輪郭　四 唯物史観の内容　五 結論
第四部　文化論……379
九　現代文化の状勢……379
一 現下の文化運動　二 文化統制現象の分析　三 自由の概念と文化の自由
一〇　現代唯物論と文化問題……400
〔付〕　社会科学に於ける方法……414
認識論とは何か……419

第一章　認識について……421
第二章　真理について……431
第三章　真理について（続き）……441
第四章　意識について……448
第五章　思想について……456
〔付一〕　クリティシズムと認識論との関係……468
〔付二〕　哲学の現代的意義……487
思想の科学　クリティシズムと科学的精神
解説……小松茂夫　506
あとがき……鶴田三千夫　516

現代哲学講話

序

私は今現代哲学に就いて、教師風の説明を与えることを目的としているのではない。無論おのずからそういう結果になった部分もあるし、又そうなることを避けねばならぬ理由もないのだが、併しいつも私にとって、もっと遙かに大事な問題は、吾吾が実際に生活しているこの現在の社会に触れて発生する処の、時事的な或いは又原則的な問題なのであって、こうした時事的又は原則的な問題をば、時事的で且つ原則的な形で（そしてさし当り之が本当の「哲学的」という言葉の意味でなければならないと思うのだが）解決してみようという企てなのである。ここに集めて分類した論文の内容は決して自信のあるものではないが、併し今云ったその意図に於ては、決して曖昧ではないと思う。

現代の時事的又原則的な問題を哲学的に取りあげようというこの意図を、簡単に云って、哲学的評論又は科学的批判と呼んでもいいだろう。曾て文明批評とか文化の批判とか云われたものも、実はこういう形によって理論としての資格を有てるようになるのではないかと考える。尤も哲学は科学からどう異るかというようなスコラ的質問も出るかも知れないが、私がここで問題とする哲学というのは、文芸や科学又其の他の社会現象と並んで、何かの態度に立って批評される一対象物に過ぎないような云わば哲学プロパーを意味するのではなく、却ってそうした一切の現象を批判の対象とするような、生活の一種の態度そのもの、或いは少なくとも思想の態度そのものを意味するのである。つまりここで問題になる哲学は、統一的な推進力を持った世界観から始めて、普遍的で科学的な、即ち実際的な解決力を備えた方法までを、意味している。哲学プロパーは、こうした「哲学」による処の批判にとって、必要な参考資料ではあるが、他面その単なる一材料に他ならないとも云える。

世間の或る人達は、生活に於ける思想の意義をあまりハッキリと捉えていないようである。だが思想は決して単なる観念や何かではないので、世界に対する吾々の生活反応（それが世界観というものの意味だ）であり、又この生活反応に於て発生する問題の解決の唯一の手段（それが論理というものだ）なのである。哲学はこうした意味に於て思想なのだ。処で、一切の現象に対応する観念には、必ず思想が潜んでいる。この思想によってこうした観念は生き又客観に対応する客観性を持つのである。文芸現象などに於ては近来この点が最も強調されていいのではないかと思う。

統一的な推進力を持った世界観、普遍的で実際的な解決力を備えた方法、と云ったが、俗間の多くの批難と注文とに拘らず、私は今以て、或いは寧ろ近来増々、透徹した唯物論だけがその資格に値いする唯一のものであることを経験しているのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ただこの書物などに現われている限りでは、唯物論のこの透徹力に追随することが、遠く私の思想的エネルギーの及ばないものであることを示していはしないか、を恐れるだけだ。

ここに載せた論文の内には、今では却って私自身反対しなければならぬような見解も含まれている。例えば第一篇の「自然弁証法」などがその最も著しいものだ。之に就いてはまだ充分に私見を決めかねているが、仕事の上での友人達や敵対者さえの助言を利用して、ひとりこの問題に限らず、フランクに客観的に自分の思想水準を高めることに力めたいと考えている。読者には、この本から充分な問題の解決を期待して貰っては困るのであるが、併しここに緒口を見せているだろういくつかの示唆が読者の眼に止まるならば、その示唆を実現するに役立つような、意味のある批評を下して欲しいと願っている。

之は曾て二年程前に大畑書店から『現代のための哲学』と題して出版したものの改版である。「世論の考察」・「ファシズムのイデオロギー性」・「共通感覚と常識」・「純文学の問題」の四つは、あまり特殊な問題に渡った小論文なので、之を除いて、代りに「哲学の話」という講話風の文章を入れた。書物全体の表題を『現代哲学講話』と改めるに之が相応しいだろうと考えたのである。

第一篇は主として自然科学に関し、第二篇は主として社会科学に関し、第三篇はジャーナリズム現象の理論的分析であり、第四篇は哲学自身に関するものである。

一九三四・一一

東京　戸坂潤

〔旧版〕『現代のための哲学』序

之は現代に於ける若干の基本問題に就いて試みた、哲学的評論である。曾て文明批評とか文化批判とか呼ばれたものは、現代では、社会の一般的危機の自覚の下に、マルクス主義的イデオロギー理論となって現われている。この理論はであるから、単に社会科学の重大な一問題であるばかりではなく、同時に現代に於ける進歩的哲学に課せられた最も広大な課題でもなければならない。哲学はここで、単に一つの専門領域の科学としてばかりではなく、それよりも先に、進歩的で統一的な世界観として、時代の本当に科学的な批評の道具として、役立つことが出来、また役立たねばならない。こういう点を目指している意味で、この書物の内容は、哲学的評論と呼ぶに相応しいだろうと考える。

無論茲に纏めたものは、私自身の経験が可なり制限されているために、取り上げるべき多数の重大な基本問題を取り上げることが出来ず、又取り上げることの出来た問題に就いても、そ

の触れ方が充分に立ち入ったものとは限らなかった。そればかりでなく、或る論文に就いては、今日の私は積極的にその誤謬を指摘したいとさえ思っている（例えば「自然弁証法」に於ける考え方の如き）。――だが私はこれ等の論文を通して、自分の誤謬を克服し自分の制限を踏み越えようとして来たのだし、又之からもそれを怠らない積りでいる。で読者はこの書物から、諸問題の結論めいた解決を期待してはならない。之は寧ろ問題解決への示唆のために書かれたのだ。

現代のための哲学的評論＝科学的批評を行なうために何より必要なのは、理論家乃至哲学者と、各専門諸科学者との、意識的な共同作業である。尤もそういう言葉は誰でも云いそうなことであるが、今云うのには一定の客観的な内容があってのことである。現代ほど諸科学（文芸は云うまでもない）がそれぞれの専門の関心そのものからして、哲学的世界観を必要とし、又その必要を自覚せざるを得なくなった時代は曾てなかった。科学者は理論家乃至哲学者に向かって様々な根本問題の解決方を委任しつつあるのである。処が理論家乃至哲学者はこの委任に役立つにはあまりに不用意であったか、或いはあまりに立ち後れがしていはしなかったか。現代のための進歩的哲学は、この立ち後れを取り戻し、直ちに役立つべき範疇を用意しなければならない。そういう急務を帯びている。だがこの急務を遂行するに必要なのは、他でもない、諸専門科学へ哲学自身の手をさし伸べるということでしかないのである。専門諸科学と哲学的理論とのこの必然的な共働は、哲学的評論＝科学的批評にとって原因でもあり又結果でもある。

第一篇は自然科学関係の問題に就いて、第二篇は社会科学乃至哲学関係の問題に就いて、第三篇はジャーナリズムに関する問題に就いて、第四篇はこれ等のものに関する時事的批評と示唆的な試験と時評である。――「社会科学に於ける実験と統計」と「新聞現象の分析」とは新たに発表するものである。

一九三三・一

東京　戸坂潤

第一篇

一　社会に於ける自然科学の役割
二　自然科学とイデオロギー
三　ヘーゲルと自然哲学
四　自然弁証法

一　社会に於ける自然科学の役割

自然科学は云うまでもなく、少なくとも歴史的社会から区別された限りの自然に関する科学である。だが同時に夫は又歴史的社会の所産であり、歴史社会的な存在の一つである。この関係の裏に吾々の問題の凡てが横たわっている。

夫が一つの歴史的な存在だということは併しながら、決して自然科学自身にとって単に外部的に過ぎないような規定に止まるのではなくて、大事なことには、同時に夫が又自然科学自身の内部的な――即ち取りも直さず自然科学的な――規定ともなって現われる処のものなのである。而もそうやって自然科学が社会から受ける処の内部的な規定は更に、決して自然科学の単に周辺的な規定ではなくて、実は之こそ正に、その中心的な根柢的な規定となるだろう。吾々は今この点を明らかにしようと思う。

自然科学の諸理論は、自然観察・実験・数学的操作・等々という研究方法を用いねばならず又夫を用い得るという処に、他の諸理論とは異った特色があると考えられているにも拘らず、その叙述方法に於ては、他の一切の理論と全く同様に、概念の体系でなくてはならぬ。単なる観察・実験・数学式の運用は、それだけでは、それに沿うて現実的に展開して行く一定の思考を離れては、自然科学にとって何の意味も持たない。思考は処で無論概念の体系による外はないが、そういう概念体系が即ち理論と名づけられる処のものである。実はこういう概念の体系――理論――があって初めて、発達した系統的な自然観察や組織的装置による実験や物質的な意味を持つ数学的操作も行なわれることが出来るのである。波動による所の干渉圏の実験は、科学の素人にとっては単に多彩な色の知覚にしか過ぎない、之が波動の存在を示す実験として成立するためには、すでに波動の一定理論がなくてはならないのである。

だがこの概念の体系――理論とは之だ――は無論、科学者が個々の概念を構成しそしてそうやって出来上った諸概念を更に一つの体系にまで構成するという手続きによってしか与えられ

ない。それは自然科学者が自然に就いて持つ処の広い意味に於ける経験――心理学的な知覚や科学上の知識や学徒としての体験――に頼る外に道はないのであるが、併しそのことは取りも直さず、科学者が自分の（又他人の）経験を追跡し得るような論理を有っていて、その論理の糸を具体化しながら手繰って行くということに外ならない。だから自然科学の例の概念の体系を支持しているもの、即ち自然科学の理論を成り立たせるもの、即ち又概念と概念との間をつないでいる処のものは、終局に於て、具体化され行くこの論理だということになる。

物質とかエネルギーとか場とか波動とか空間とか時間とかいう物理学的諸根本概念は、こうした論理によって構成され又こうした論理によって一体系にまで結合・組織されるのである。

処でこの論理は論理それ自身として又、自分に固有な諸根本概念――範疇――を持っている（普通哲学的な概念と考えられる）。実体とか関数関係とか、因果性とか蓋然性とか、がそういう範疇の例として取り上げられて好いだろう。この論理学的根本概念――範疇――は云うまでもなく自然科学の諸概念の内に、その根柢として、含まれているが、併し決して自然科学にだけ固有なものではない。それが論理学的である所以である。

物理学的な意味での物質とかエネルギーとかの概念は成る程自然科学にだけ固有なものだろう。従ってこういう根本概念をそのまま無条件に、他の科学の領域にまで持ち込むことは許されない。だがそういう諸根本概念を造り出す処の論理的範疇の体系は、即ち論理の道具立ては、もはや自然科学にだけ固有なものなのではない。論理は凡ゆる知識領域に渡って普遍的で唯一のものでなくてはならぬ、認識の一部分にしか通用しないものはもはや論理ではないし、又論理に幾つもの異った論理があっては抑々論理にはならない。「論理」は凡ゆる科学の理論に対して共通でなければならぬ。

だから特殊な一理論に外ならない処の自然科学の概念体系の根柢には、この一般的な論理が、論理学的な範疇の体系が、横たわっている。そういう一般的な範疇体系が処で哲学なのである*。で自然科学の理論は必ず、何等かの特色ある哲学に基いて出来上っているのである。

* 哲学をこうした論理＝論理学と考えることに対しては、恐らく多くの観念論的哲学者達――今日彼等を一般的に「生の哲学」者と特色づけて好いと思うが――から、苦情が出ることだろう。彼等は一方に於て論理の生きた概念を有たないと共に、他方哲学が思想の技術である所以を理解しない。だから彼等の哲学は結局、告白文学の体系となるのである。

尤も今云った意味に於ける――論理＝論理学としての――哲学も、一般的で形式的な、即ち諸科学の諸概念をそのまま受け取って包括出来る、体系であるにも拘らず、形式的・一般的なりに、それ自身にだけプロパーな概念体系を組織しているのは事実である。哲学には――職業的・専門的な――哲学体系にしか現われて来ないような色々の概念が見出される。例えばプラトンのイデアであるとか新しい処ではフッセルルの「本質」であるとかは夫である（これ等の概念は元来は全く、人間が日常

生活に於ていつも使っている日常概念から出来上ったのだが、それがやがて専門的な職業上のテクニカルタームとなり終ったものである)。この点を通過すると哲学はもはや必ずしも形式的な論理の体系ではなくなって、それ自身に一定の内容ある存在論的体系にまで発育し具体化されて行くのである。で哲学にだけプロパーなこういう哲学的専門諸概念は、自然科学にプロパーな前の諸概念と、無論すぐ様一つのものではない。

だがそれにも拘らず、この哲学プロパーの体系に於ける諸概念は、論理の範疇体系と、その兌換価値・キャッシュバリューを一つにしていたわけだから、この——共通な——論理の範疇体系を通して、前に云った自然科学的諸概念の体系と、一定の共同契約を結んでいなければならない。だから自然科学の根本概念乃至範疇と哲学の根本概念乃至範疇との間には共軛の関係が横たわらざるを得ない。二つのものの間には合理的な媒介・連関関係が設定されていなければならぬのである。一方に於て行なわれる範疇体系は、適当な兌換条件の下に、他方に於ても亦行なわれる、という契約が結ばれていなければ、自然科学は自然科学であり得ず、哲学は哲学であり得ない。範疇論的に云って、論理学的に云って、そうなければならない。

このことは併し、自然科学の歴史がすでに物語っている処である。近世自然科学に於ける根本概念は或る意味では大抵哲学(当時夫は形而上学)体系からの所産である。エネルギー不滅則となって現われるエネルギーの概念は、ライプニツにとっては、彼のモナドロジー(夫が彼の存在論だ)によるモナドの表象力に相応せしめるために構成されたものだし、運動量不滅の法則となって現われる運動量の概念は、デカルトにとっては、彼の幾何学的物体観から出て来るものである。このライプニツ主義とデカルト主義との対立——ライプニツはデカルトの幾何学主義に対して力学主義を押し立てることによってその存在論への動機を得ている——は、単に存在論＝実体論の上での対立ではなくて、自然哲学(現代の言葉では)＝自然科学の上での対立なのである。そしてこの二つともが実は、更に古くスコラ哲学に於ける実体——それは神であり不生不滅の常住者である——の概念の変形したものに外ならなかったのである。

以上のことは又哲学の歴史の側からも知ることが出来る。今日吾々が実際に用いることの出来る哲学は、吾々が東洋人であるにも拘らず(或る哲学の博士の如きはその著書に「我は日本人なり」というリフレーンをつけているが)、決して印度哲学や支那哲学、仏教哲学や況して「日本」哲学、などではなくて、所謂西洋哲学・欧州哲学なのである。西洋哲学は、その学的実質から見れば、西洋の哲学ではなくて今日では吾々の哲学なのである。もし「日本哲学」などと名乗る哲学があるとすれば、恐らくそれは自然科学などからは全く無関係に絶縁された非哲学でしかあるまい。それは馬占山の棲家を爆撃することを主張し得ても、肝心な重爆撃機のエンジンの故障一つ直すことの出来ない哲学に相違ない。*

* 読者は昔我が国で和魂漢才説という重宝な思想のあったことを知っているだろう。維新後になるとそれが士魂商才の説となる。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com